

● 第8回野外見学会のご報告 ●

南 寿 宏

第8回の野外見学会は、月の名所の桂浜で行われた。桂浜竜王岬の西側には四万十帯のタービダイト相が分布している。タービダイト相とは、水分を十分に含んだ未固結の砂岩と泥岩の互層が地震の際に海底地滑りを起こし、変形したもので、その表面には生痕化石や堆積当時の水流の跡（ソールマーク）、級化成層等の堆積構造が見られる。また、浜辺には色とりどりの小石があり、五色の石として有名である。

4月26日（日）。無風晴天の、絶好の観察日和である。桂浜花街道沿線には駐車スペースが設けられているので、好都合である。会員諸兄諸姉の多数の参加を祈念し、竜王岬西側に陣取る。9時45分頃から観光バスが何台も続々と到着し、参加総勢250名余りが桂浜の浜辺を埋めつくし、壮観である。えっ、0が一つ多い？これはサービスです。

さて、25名の参加者を前に、川澤啓三会長の歓迎あいさつがあり、次いで吉倉紳一高知大学教授から四万十帯の概要説明がある。大型化石が皆無で時代未詳層と言われ続けてきた四万十帯であるが、高知大学のグループがその解明に乗り出し、見事に解きあかしてから20年。その中心メンバーの吉倉教授の説明を現地で実物を目の前にして聞けるのだから、この日の参加者は幸せである。資料は波田重熙教授の「高知市の地質」である。波田氏もやはり高知大グループの一員であって、数年前に神戸大学に教授として赴任、その直後に地震に遭遇された方である。

さて、吉倉氏の美しいバリトンの響きに一同すっかり酔いしれた後、3か所に分かれて巡検をする。

1か所目は竜王岬岩体の化石探しである。砂岩の表面にゴカイ類の這い跡が無数にある。このような、過去の生物の痕跡を生痕化石という。このような地層には巣穴に詰まった砂が固まり、サンドパイプとして観察されるものなのだが、この場所からは発見できなかった。2か所目は北の露頭での地層の堆積構造の体験である。地層が逆転しているかどうかは地殻変動を調べる上でとても重要なので、時間をかけてじっくりと調べる。クロ

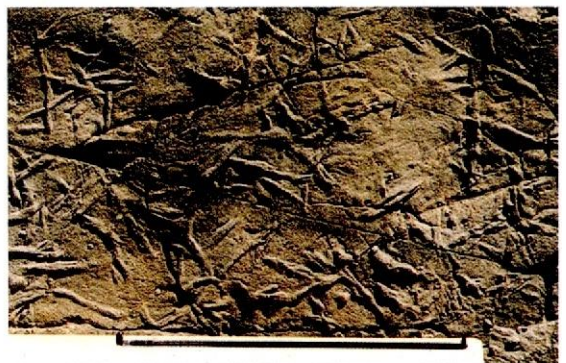


図 桂浜の生痕化石（撮影 三本健二）スケールバーは10cm

スラミナで古水流の向きや地層の上下、級化成層で地層の上下が分かるという、高等学校レベルの一通りの説明があった後、吉倉氏が地層を指差し、どちらが上か分かりますかと筆者を覗き込む。まるで入学試験の口頭試問である。複雑な地層だが、何とか判断して答えると、教授、ほーらひっかかったと、にんまり。どうも罠にはまったらしい。人が悪い御仁である。3か所目は全員で浜辺の石を探す。五色の石である。この石の正式名称はチャートで、小さな珪質の殻を持った放散虫というプランクトンが海底に堆積してできたものである。放散虫は古生代の昔から滅びることなく生息している動物で、進化が速いことから年代決定に用いられている。このような化石を示準化石という。時代未詳の四万十帯の年齢が決定できたのもこの虫のおかげである。担当は岡村眞氏であった。今、海底活断層を研究されている、あの岡村教授である。他にもいろいろ珍しい石を採集し、見学会は無事終了した。